

〔『法学新報』第32卷10（370）号 大正11年10月1日〕

漫 録

○故三宅碩夫君追憶談

榎崎平太郎君

○三宅君の長逝は誠に痛惜に堪えませぬ。私は始めて三宅君を知つたのは菊地先生（池）の書生をした時でしたから、明治二十五年頃と思ひます。其頃三宅君は既に弁護士となられて居りました。私は書生で、三宅君は弁護士でありましたから、其の時から世話になつたのであります。又三宅君は備中で、私は備後でありましたが、家はお互国境で近く、三宅君の親類も僕の家の附近にありました様なことから一層懇意になつたのであります。○私は実業界に入りまして、北海道へ参りましたが、上京の都度必ず三宅君を訪つれ、引続き親密に殆んど兄弟の様に致して居りました。其の後私は船を買ふ決心を致しまして、三宅君に相談しました。二人の金を出し合ふても不足なので横山久太郎君の保証で買ひました。其の船は海幸丸と云ふのですが、原価の二十倍にもなり其の儲は三宅君の不動産にもなり、又資産にもなつたのです。其の後二人で海幸株式会社を組織し、共に事

業を經營しましたが、私は特に同君に感服することは、只だの一ペンも意見の衝突を見なかつたことであります。事業の計画、発展と云ふ方面には、私が当り、三宅君は収支計算の方面を担当せられ事業の遂行は私に任せて呉れましたから、私も頗る遣りよかつたのです。斯様なことは中中出来ぬもので、是等は三宅君の温厚にして寛容なる其の性格の然らしむることと、深く感じて居るのであります。

○三宅君は書生を愛し又よく人の世話を致しました。一体三宅君は人に頼まれて「ノー」と云ふことのない男で、金さいあれば、必ず出す。私は三宅君は金を貯めるには不適當な人物であると、考へて居りました。そうして其の世話も誠心誠意で、全く敬服致します。私の妻が死んだ時などは何にから何にまでお世話になりました。葬式の事なども、華美にならぬ様にと、夫れは広告の文面に至る迄で内外、総て一人（遺）で遣つて呉れました。私は三宅君の葬儀には親友である所から葬儀委員の一人として携りました。注意は致した積りですが華美を好なかつた同君の性格に照し、地下で或は不平を言つて居らぬかと考へ、内心恐縮して居る様な次第です。

○三宅君は実業の方面に、相当の地位があつたにも拘はらず、其の名声のあまり世間に聞えなかつたのは、華美を好まず、自ら交際を求めぬ事と、上の人に頭を下けない為めであろうと考へます。人に接して上下の別を設けず、書生であつても同し取扱をする所に、同君の人格の閃があるうと思ひます。

○三宅君はよく、六十になつたら弁護士をやめて、余生を公共

事業に尽し度いと話して居られたが、今や五十有八、茲一兩年にして其素志に就かれんとするに当り俄に長逝せられたのは、重ね重ね遺憾の至りです。前年新大学令施行せられて後私には日本大学出身であります所から、日本大学の基金の事を話した事があります。其時三宅君は中央大学でさへ未だ基金が出来ない位だから、日本大学などは出来ぬだろうと云ひますから、私は中央大学で拵へるなら、日本大学でも必ず作ると云ひますと、其の事を早速平沼驥一郎さんに話したと見え、平沼さんから私に話があると云ふ様な次第で、公共事業殊に学校に關する事には中中よく尽されました

○又三宅君は相模(模)に尽力せられたことは周知のことですが、世間で想像する様に左様に金を投じて居る様なことは断然ありません。之は全く人の想像外であります。只だ自分の誠意で、相模道(模)を奨励し、指導致して居つたので所謂相模(模)鼻負の様な華美な事はありません

○三宅君は幅物を沢山蔵して居ります。八百本位はありませう。然し画の幅は、恐らく一本もありますまい。儒者の幅であつて、文句さい良いものであるなら、必ず買ったものです。私は彼の拳骨で有名な物外和尚の『煤掃や第一番に腹のうち』の一幅を求めました時、三宅君に見せると、これは良い句であるとして頗る感心して居りましたが後で訪ねました時、早や物外(外)禅師の一幅を掛けて居りました。斯様な次第で、常住臥座其の修養を怠らなかつたことは、私は全く敬服致しまする所でありませ

○三宅君の郷里へ行つて見ますと、其の祖先の墓は代代同じ位の寸法で、而も小さく造られ一列に並んであるのです。或時此の事を三宅君に尋ねましたら、墓の大きさを定めて置かねば、困る時には建てられぬ、夫れで誰れにでも建てられる様に代代同じ寸法にすることになつて居る。又自分の戒名も父より優つたものは附けぬこととしてあるとの事でした。三宅君の人格の高潔なことは其の修養にも因ることでありませうが、斯様な家風の下に人と成られたことも亦与つて力あることと思ひます

○永い間親交を続けて来た我が三宅君は逝かれました。私は寂寞を感じることに深いものがあることは、人数倍であると共に、同君を偲ふの情も亦、人数倍(々々)であります

○

佐藤 正之君

三宅君の死は年来親交を忝ふして居つた私は勿論中央大学の為めにも懇切到らざるなく尽されたる人であれば実に哀惜に堪へない

君の性格に付ては岡野学長の弔辞に「温玉の如く剛鉄の如し」と花井博士の弔辞に「人を待つに誠を以てし人我を欺くも疑はず」なる語で尽くされて居つて一語の加ふべきものはない且つ君が事業の上に於て一身(身)同体とも云ふべき同郷の親友檜崎君のお話がある筈であれば私の話の如きは眞の蛇足に過ぎないのである

顧みれば明治三十七年であつた、中央大学も予備校などを設け又経済科、商科を独立せしむるの必要が生じて来て校舎が狭

隘であると云ふ所から翌三十八年は創立二十年に相当すれば該記念事業として出身者が共同して講堂を新築し母校に寄附しようではないかとの議が起つた夫れで十二月の學員總會に此議を提案した時恰も日露大戦中で旅順要塞は難攻不落の有様であつて露国の大艦隊は亦漸く我国に近づきつつあり国家の一大事として挙国一致老幼婦女の微細なる余力までも挙て之を軍資に寄附しようと云ふ際なれば記念事業を企てるは其時機にあらずとの強硬なる反対論があつたにも拘はらず軍事は軍事、教育は教育である況んや我校の創立二十年なるものは再び来るものに非ざれば万難を排して此事業を成さうと云ふことに決議せられ進で其委員と委員長を選挙することとなり委員長を誰れ彼れと名士に交渉したけれども更に応ずる人がなかつたのである夫れで花井博士から私に言はるるには此事業は確かに君等が計画したのであるから事茲に至て君が委員長となるにあらざれば立消になるから是非引受けよとの事であつた私は答た魯鈍なる私は到底其任ではないが止を得ない然らば三宅君と伊藤高行君大久保子來君を顧問として其援助の下に御引受しようと答へたが三君共敢然として快諾せられ私は常務委員長三君の外石山、井上、花井、大場、両渡邊、田中、武田三浦等の諸君が常務委員と云ふことになつた然るに私は尊信する諸先輩より見込なき事業を何故に引受くるやとの懇切なる勸告を受けたが私は此事業の成功の困難なることは十分考へるけれども私は先鋒を務めるので全力を尽くして若しも見込なきに至つたならば全責任を負ふて引下がる積りである其時にはあなた方は二陣三陣と為つ

て何とか仕末をして下さるだらう私は居らなくなつて名士雲の如く控へ居らるる限りは母校の存在には何等の影響もなからうと決心したのであると答へたれば宜し跡は引受けるとの快答を得たのであつた此事業は其後幸にも日露戦争も旅順開城より着進展して遂に講和に進み一方には委員諸君の熱烈なる御同情により好都合に運び目的の記念講堂竣工し三十八年十一月十一日を以て記念式委員長奥田博士に依り盛大なる祝典を挙げ僅かながらも残余金を剩して決算報告を為すことを得たのは三宅君等の御蔭であつて君と最も懇親になつたのは此時からであつた然るに大久保君先づ逝き伊藤君逝き今亦三宅君逝き三君皆故人と為られたのである

又明治四十三年の創立二十五年の記念会及大正五年の三十年記念会とも君は何時も全幅の努力を惜しまず卒先^(率)して尽力せられた

大正六年中央大学校舎の災に罹るや如何に進行すべきやは同人の憂慮に堪へざる所なりしが元衛町騎兵營跡に仮校舎を設くべしとの説あるや君は二三の人と直ちに行て実見し好適地とし議忽ち決し陸軍当局の好意に依り同所に移りしが一万六千坪の宏潤なる場所なれば其快言ふべからず時の大島陸軍大臣は校地としてならば払下げ得べしの言明ありたれば其私下を受くるの議起り君を始め飯田延太郎君、河野秀男君其他の學員諸氏は大に尽力せられて資金調達の見込も立ちて議熟したる時には既に当局の議變じて新官庁の敷地に予定せられて如何ともする能はず憾を吞んで錦町の旧居に戻ることと為り大正七年九月に錦

町校舎の再築が出来上つて引越し一と先づ安心はしたが引続き解決を要する大問題は先年来の懸案たる大学問題であつた愈々十二月を以て新大学令は公布せられて益々此の問題の解決の急を告げた私は年来の宿痾の爲めに衰弱し且つ打撲傷を負ひ歩行にも苦む有様なれば已むを得ず辞職すべきことを決意し先づ昵近なる諸先輩に謀り次に三宅君を訪問して其意を述べた君はやア一夫れは鬼の霍乱だまさか死ぬ程でもあるまいと云はれた私は此兩三年来体量三四貫目を減じ氣力既に昔日の如くならずマコして近来引続く病痾に自分乍ら呆れたのであると答へた君は母校の現状に関し熱心に意見を述べ其労苦は察するに余りあれども暫く静養の上御互に母校の爲めに尽くさうではないかと種種懇切に慰諭せられた當時慰められた私は尚ほ残骸を保ち君は先つて故人となられたのである

私は翌大正八年一月下旬迄約一个月間神奈川県湯河原温泉に滞在して病を養ひ帰京した時には母校の方針も確立して居つた夫れより新大学令依拠の準備も着着進行し七十万円の供託金も岡野学長を始め理事者の尽力と学員諸君の熱誠なる援助に依りどうにか見込も立つた此間に於ける三宅君の尽力は多大なもので市内は勿論京都大阪迄でも忙中を割て奔走せられ又森本君に代り基金部長も引受けて尽力せられた愈々同年十二月を以て新令に依る大学たる可き認可を主務省に申請した所が主務省より中央大学は火災の爲めに図書を喪ひたるに因り此図書を新に購入し及図書館を建設する爲め其資金を準備せざるべからざることを命ぜられた理事者も当惑の余り之を基金部長たる君に相

談した所が君曰く仮すに日時を以てせば無論此費用位の寄附金は集まるけれども右から左と云ふ訳に行かないから已むを得んことであれば自分が二十三万円を引受けて寄附しようとして即座に之を申込まれた主務省では之に由り資力十分なりと認めて大学令に依る大学たることを認可したのであつた其後中央大学は日進月歩の勢を以て隆盛と為り寄附金も大に増加したれば君の此出資を煩はマコざらずに本年八月予定の図書館も竣工し図書も一と通り充実に得て目下更に三百坪の校舎増築に着手し此工事は着工しつつあるのである私は君の病床に訪問して其時時報告したが母校思ひの君は非常に喜ばれて是非行て見ようとの事であつたが遂に其運びに至らず死なれたのは如何にも残念である

去る十八日の夕刻君の遺骨を東京駅に見送つたが同所は君と屢々邂逅した場所であつて君がニコ／＼笑ながら軽快な体度で来て佐藤君と呼ばれた音容が想出されて帰途には独り暗涙に咽んだのであつた